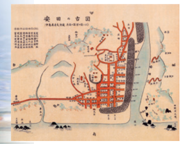
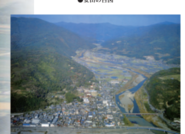
郷土の先人たち

安田町は藩政時代より政治、経済、教育、文化などの教学の地として広く知られている。
近世中期の儒学者宮田定則。幕末の儒学者で南学中心の学風に陽明学の新風を注いだ岡本寧浦（退蔵）。
藩政後期の文人で安田少林山常行寺住職叡志静禅師（徹翁）。採樵歌百首を出した歌人で南学安田派の学閥を誇り、安芸郡勤王志士育ての親高松小埜（順蔵）。小埜の弟で蘭方医学を学んだ西洋医師高松濤亭。
医師で儒学を学び蘭方の医学を修めた寿藤梅外（基道）。幕末の志士野根山二十三士副首領清岡治之助。
幕末の志士野根山二十三士の柏原禎吉・近藤次太郎・宮田頼吉・柏原省三・宮田節斎・豊永斧馬。
幕末の志士吉村虎太郎らの天誅組砲隊伍長安岡斧太郎。土佐海援隊士で明治になり秋田県・長崎県・千葉県・高知県の知事、農務省大臣、貴族院議員を歴任した石田英吉。小埜の長男で勝海舟の海軍塾に入門し砲術、操船術を学び土佐海援隊士として活躍、後に龍馬の遺跡養子となり坂本直と改名した高松太郎。
小埜の二男で叔父坂本権平の養子となり坂本直寛と改名、自由民権運動家で高知県議会議員を務めた後、北海道開拓とキリスト教伝道に尽くした高松南海男。伊達太夫の名で活躍、文楽座の重鎮として六世竹本土佐太夫を襲名、関西義太夫界三傑の一人と称された南馬太郎など数多くの著名人を輩出している。



●安田の古図



●現代の安田

岡本寧浦（退蔵）一七九四〜一八五三、儒学者

寛政六年、安田浦の乗光寺五世、弁翁の子として生まれる。幼名を有隣、長じて大年、号は始め雄峯、後に寧浦と唱えた。
上京して本願寺に学び仏典に深い造詣を示したが、仏法が活社会に実益の少なさを悟り、仏教より儒学に移った。
大阪の篠崎小竹や大塩平八郎、江戸の安積艮斎、佐藤一斎らと師友の交わりを結んだ。
天保六（一八三五）年、郷土に帰り、岩崎弥太郎の母の姉、ときを妻にむかえ、再び大阪に出て儒学を教授、評判が高くなり、備後の福山侯に招聘されるが、土佐藩主山内豊照がこれを聞き「土佐藩の大学者が他藩に採用されるのは土佐の名おれ」と藩の教授館下役として採用。時に彼は四十五才の知恵盛り、勤めのかたわら、紅友社という家塾を開いた。
酒と交友は彼の生命といわれ、樋口真吉、武市瑞山、鹿持雅澄、吉田東洋らと交わり、門人に岩崎弥太郎、清岡道之助、河田小龍らがあり、その数一〇〇〇余人に及んだ。
嘉永六年十月没。六十才。大正十三年正五位を贈られる。墓は高知市薊野、東真宗寺山南峰。

高松小埜（順蔵）一八〇七〜一八七六、儒学者、歌人

文化四年、安田浦の郷士、高松益之丞の長男として生まれる。本名は順蔵又は鶴吉と呼び、小埜と号した。
幼いころから郷土の学者であり、祖父にあたる高松弥三衛門の指導を受けて学び、わずか八才で郷士職を継ぐ。後に、江戸に出て学問に専念し経書や歴史の研究、また長谷川流居合術を修業し、その奥義を究めた。
絵を楠瀬大枝や壬生水石に師事して南画大雅堂の流れを学び、書、篆刻を壬生水石に学んだ。
和歌の道にもいそしみ、諸国を巡り、学者や歌人と交わり、その足跡は土佐一国にとどまらず遠く九州にもおよび、その歌作二千余首は歌集「採樵歌」四巻となった。
家を弟、勇蔵に譲り、野にあって権威に屈せず自適の生活を送った。
彼の徳風と学問を慕って教えを請う者が多く、その中には中岡慎太郎を始めとする勤王志士が数多く存在し、まさに安芸郡勤王の志士の育ての親である。
妻、千鶴は坂本龍馬の長姉で龍馬も度々安田を訪れ、龍馬の大成には小埜の感化が大きかったといわれる。
明治九年八月没、七十才。墓は安田町常行寺山。

●高松順蔵（小埜）の墓

清岡治之助 一八二六〜一八六四、二十三士副首領

文政九年、中山郷間下の大庄屋、清岡丈五郎の長男として生まれる。名は正道、桂山または曲水と号す。
胆力があり、沈着の人で、幼少のころから勉学に志し、田野浦の医師、宮地太仲について学び、高知に出て岡本寧浦に儒学を学び、そのかたわら剣術を土方麓造に、柔術を小川為十郎に、田所惣次から砲術の指導を受ける。のち、江戸に出て安積艮斎に入門、さらに平田派の国典を学ぶ。
文久二（一八六二）年、藩命により藩主に従って上京したが土佐勤王党に加わり、しばしば斬奸を行った。
勅使三条実美の東下に当たって扈従し、帰国後藩校田野学館の文武教頭にあげられる。
主として国学を講じ、郡下有為の青少年たちを指導した。
のち、尊攘論を主張して画策、武市瑞山が下獄すると、藩論の転化を企て野根山に屯集したが、藩吏に追われて阿波に逃れようとする途中捕らえられ、元治元年、奈半利川原で斬首された。二十九才。
贈従四位。墓は安芸郡田野町福田寺。

●清岡治之助の記念碑

●清岡治之助屋敷跡（間下）

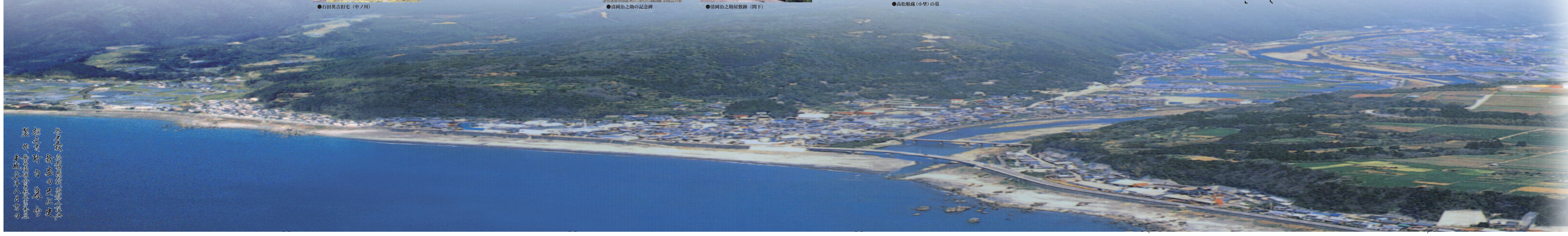
石田英吉（伊吹周吉）一八三九〜一九〇一、秋田・長崎・千葉・高知県知事

天保十年、中山郷中川の医師、伊吹泰次の長男として生まれ、名を周吉といい、虹霜と号した。幼少のころから頭脳明敏、長じて安田浦郷士、高松小埜に経史を学び小節にかかわらず大節を重んじたという。恩師小埜の妻は坂本龍馬の姉千鶴であった関係で、龍馬がたびたび安田に足を運んでいたので龍馬とも知りあうことができた。
嘉永七（一八五四）年、郡奉行所に併置された藩校田野学館に通学、郡内少壮の士と交わった。
文久元（一八六一）年、大阪に出て蘭医の大家、緒方洪庵の門に入り勉学のかたわら、天下の志士とも交わり、一身の治療より、むしろ国家の治療こそ大切であると考えるようになる。
慶応二（一八六六）年、高杉晋作の奇兵隊に入り、また木戸孝允とも交わる。三年、坂本龍馬が海援隊を組織すると高松太郎らとこれに加って活躍した。大政奉還後の東征軍振遠隊では御用係を務め、ついで奥羽戦争では同隊の軍監として各地を転戦し、戦功をたてた。
明治二（一八六九）年、長崎県小参事に挙げられ、のち、秋田県、次いで長崎県、千葉県、高知県知事を歴任。第一次伊藤内閣のとき農商務大臣、陸奥宗光の下で次官を務めた。
のち、貴族院議員に勅選され、また男爵を授けられて華族に列した。
明治三十四年四月没。六十三才。

●石田英吉旧宅（中ノ川）

竹本土佐太夫（南馬太郎）一八六三〜一九四一、義太夫名人

文久三年、安田浦の南治三郎（明治五年の壬申戸籍によると、父南百蔵の長男として明治元年七月一日に生まれたとある。）の長男として生まれる。父は高知に出て雑貨商、のちに大きな料理店「丸新」を営む。当時は義太夫ブームで、馬太郎は妹の稽古に通うのに付き添って行くうち聞き覚えて、素人義太夫の会などへ出て抜郡の才能を現した。
妹の嫁入り先の招きで、明治二十（一八八七）年、二十五才の時上京、後藤象二郎邸の書生となった。象二郎は非常な義太夫好きで馬太郎の天分を見抜き、本職の大夫の大家になるように勧めた。二十一年、大隅太夫に入門、二十二年、一座が北海道方面へ巡業に出た時、秋田で太夫の数が足りなくなり、馬太郎は大隅家に由緒の深い名跡伊達太夫（三世）を襲名して出演した。破格の厚遇である。
二十三年義太夫の本拠大阪に落ち着いて、以後、師大隅大夫を擁して彦六座、明楽座、堀江座、近松座などで文楽座に対抗した。大正二（一九一三）年大隅没後、同年文楽座を引退した名人、摂津大掾に師事。
三年文楽座に入って義太夫界の重鎮としての地位を確立。十三年、六世土佐太夫を襲名して、別看板「庵」（張出横綱格に当たる）となった。襲名狂言は土佐にちなんだ「吃又」だった。芸境は晩年までますます深みを加えた。
特に艶物の名人といわれ、美声で優雅艶麗、精密な心情的表現を持つ独自の曲調と芸風を完成した。
高尚な人格と気品を具備し、茶道をたしなみ、書画も巧みであった。昭和十二（一九三七）年引退。
昭和十六年四月、大阪西成区天下茶屋聖天下の自宅で没。七十四才。



参考文献・高知新聞社刊「高知県人名事典」。新安田文化史
撰文書・竹内暮雪
製作・安田町寧浦全国書道展実行委員会
平成二十年八月吉日